

強い雨が降る中、代官が見下ろす陣屋の土間で、渋沢栄一は土下座をしながら差し出した五百両（現在の約五百万円）の御用金を前に声を振り絞った。この御用金は農民である自分たちが汗水垂らして朝から晩まで働き、ようやく手にした金だということを代官に分かってほしかったからだ。そして代官を睨みつけようと顔を上げた時には、代官の姿はなかった。これはテレビで放送されている渋沢栄一のドラマのワンシーンだ。彼は当時十六歳だった。私と一才しか違わないのに、身分が上の武士である代官に向かって意見する姿に私は驚き、その背景になにがあったのか知りたくなり、調べてみた。

江戸時代、税金は主に農民が米や作物で年貢として納めていた。そしてそれらは、武士の給与や役所、大奥の経費として使われ、現在のように国や自治体が国民・市民を守ってくれる医療、生活保護、社会保険などの要素はなかった。さらに、幕府や藩で婚礼などの物入りがあると領民が臨時でお金を差し出さなければならない御用金という制度もあった。建前では利子をつけて返金されるということだったが、そのまま返されないこともあったという。代官は感謝もせず、ただお金を出せという横柄な態度をとっていた。そのことが渋沢に、身分制度や、年貢、御用金など、お金の流れに繋がる社会制度への疑問や不満を芽生えさせていたのだ。

またドラマには、渋沢が幕府の代表国の一員としてパリ万博に行った際、戦争で負傷した兵士の治療院を訪れる場面があった。そこで彼は、国の戦争で負傷した兵士の治療費は国が負担するのは当然のことだというフランスの制度に感動する。当時の日本には一生懸命働き年貢を納めているのに、国が国民を守ってくれる制度がなかったためだ。この経験は彼にとって、国民の税金を有効に使えば、国民も幸せになり、さらに国民は一生懸命働き、国がもっと豊かになるだろうということを考えるきっかけとなった。

その後渋沢は財務等での優秀さを認められ、新政府の大隈重信から新国家建設に協力してほしいと頼まれ、民部省兼大蔵省で働くことになる。業務改正、貨幣制度、郵便制度、富岡製紙工場、税制などの制定に携わる。特に税制では租税を米納から金納に切り替えを行い、国や国民を豊かにするための基礎となる税収を安定させることに取り組んだ。これにはフランスで見聞きした国民の生活を支える税金のあり方が影響している。常に「未来を変える税金の使い道は？」と考え、行政にあたった渋沢は、大蔵省のナンバー2まで上り詰めたところで、次は実業界で商工業の発展に尽くそうと、民間に出ることになる。

今私たちが税金により教育を受けられ、健康で安心して暮らせることも、渋沢栄一のお蔭であることを知った。国の将来を見据え、努力を重ねた姿を私も見習いたいと思った。